

方向への進化が遅れ、そのために気候の変化にも順応しえたという逆説を体験してきたのである（脳の急激な進化は別だが）。陶芸の單一方向指向に走る前の段階、それは職人芸としての姿であろう。その姿は、なぜか抽象陶芸の中にも生き続けており、むしろ制作される作品数の割合でいえば主流派にもなりかねないように思われる。日本人の陶芸に関する評価規準があまりに長く、わび・さび的言語の体系中にあり、肌あい、色あいの妙やおもしろみ、しぶさ、まとまり、くずし等々のバラエティーによって評されることを指向する抽象陶芸群がまさにその職人芸的=伝統的前衛といふ形で析出しうるようだ。それらを西欧芸術の消化不良とみると、前衛からの後退とするか、あるいはまた多少積極的に和魂洋才型の換骨奪胎とみると、実作者の意識のあり方で異なるのであろうが、走泥社の当初のもくろみから考えた場合、残念ながらそれは逃避的傾向として、あるいは日本陶芸の限界として把握せざるをえないように思われてならない。

以上が現時点での私なりの陶芸観であり、陶芸史観であるのだが、もとより個別具体的に作家なり、その作品なりを詳しく見てのものではない。ただ近年しだいに陶芸作家と接する機会がふえ、彼等と会話するうちに疑問も生れ、あるいは刺激も受けつつ頭に描いてきたものである。中でも若き作家連中の口から吐露される「おもしろければそれでよい」という、「それ以外に何があるのか」というニヒリストックな言葉、それと「あそび」との本質的な違いがあるのかという問い合わせに対する芸術の今日の社会における否定的位置づけを聞かされ、あるいは、もっとも前衛的スタイルを示してきた作家に本音としては食器がやりたいのだと言われると、どうも前衛の前衛たる所以はどこにあるのか等々、慨然としないことが出てくる。常滑という状況の中で焼き物に何らかの形で関与している以上、今日のアートシーンとまったく無関係という立場も取り得ず、今後も自己の立場を確認すべくこの種の論議に加わっていくことだろう。

( 常滑市民俗資料館学芸員 )

## 近代のメタファー

東 日出夫

### II. 心的モデルから見た 東洋と西洋

表現といふものにかかわりその考察を進めていくと、どうしても表現を生み出す源である心（精神）の問題を避けて通れない。そこでとりあえず心の構造の基本的なラフ・スケッチをし、それをモデルとして考察を進めたい。

図のように、R' は人間が生存するということによって現出する個体の存在の仕方と、それによつ

